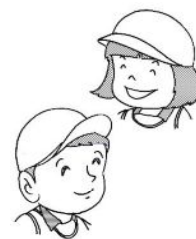


■ PDCAから、CAPDへ

県内全ての学校において、年度当初に立てた計画を確実に実行してこられたことでしょうか。おそらく、ここまで順調にP→Dが機能してきたのではないのでしょうか。

では、4月から約10か月を要して、子どもたちはどのような力を身に付け、その力を生かして実生活でいかに役立っているのでしょうか。年度の締めくくり当たる2月～3月は、一年間のまとめを行うとともに、今年度の取組を評価し、次年度に向けた改善策をみんなで練っていく時期でもあります。



・見直し活動

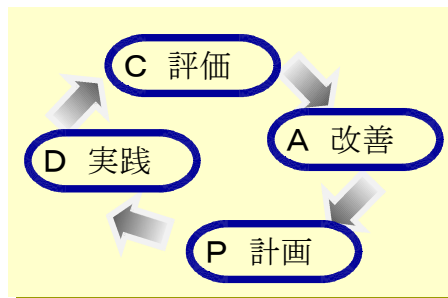
例えば、工場で作業をする方が、作業時の不備や失敗の原因などについて見直すことで、生産性の向上を図るなどの活動を行います。このことにより、作業に対するモチベーションが上がり、結果的に、継続的に見直し活動が行われるようになるといいます。この概念は海外においても「kaizen」という名前前で普及しているそうです。

・カイゼン

日本のお家芸とも言えるカイゼンは、私たちの学校現場においても非常に重要な概念だといえます。子どもを育てるといふ営みは、製造業におけるものづくりと異なりはするものの、自分で考え、判断し、表現できる子どもだからこそ、指導者が今よりもさらに適切な対応をすることで飛躍的な向上も期待できるはずです。

・評価→改善

そのために、評価から改善へと向かうC→Aについて、学校の教職員全員が知恵を出し合うことが必要です。そこで、C-A-P-Dサイクルをこの時期にスタートさせます。



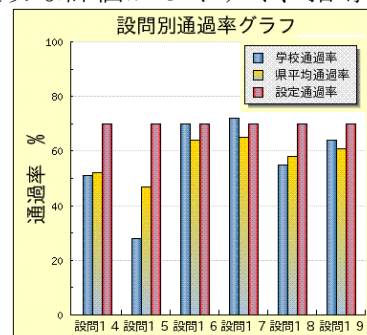
■ 客観的・分析的な評価

目標が具体的であればあるほど、評価の観点は焦点化されてきます。

例えば、「自分なりに考え、判断し、進んで表現できる子どもを育てる」という目標に対する評価は、人によってまちまちですが、「根拠をもとにした適切な主張を書き表す子どもを育てる」という目標であれば、主張と根拠の整合や文章の書きぶりなど、評価の観点が定まってきます。

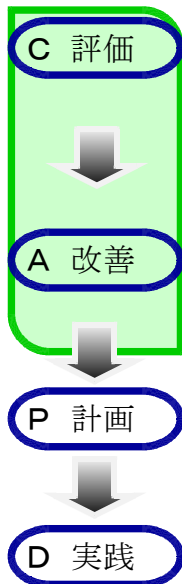
さらに目標を授業レベルまで具体化し、「資料に示されたことをもとに、自分の考えを表す」ところまで落とし込めば、適切な評価がしやすく、指導すべき内容も明確になります。評価者によるぶれも、少なくなってきます。

こうした考え方を具現化したのが、「やまぐち学習支援プログラム」の学力状況確認システムです。このシステムを効果的に活用すれば、目の前の子どもが到達した位置と県内の子どもが到達している位置を比較でき、指導方法の改善点も見えてきます。



■「やまぐち学習支援プログラム」活用に係る研究協議

1月20日(木)県庁にて「やまぐち学習支援プログラム」活用に係る研究協議会を行いました。活用協力校の先生方、問題作成委員の先生方、全校体制で取り組んでいる学校の研修主任の先生方など約200名の先生方とともに、山口県の共有財産である「やまぐち学習支援プログラム」の効果的な活用方法について、実践事例紹介や各校の取組をもとに協議を行いました。



○D実践で、「何をしたか」は成果ではない。
 ○C評価で「成果の検証」をし、改善につなげなければならない。



・アンケートから

○弱点に対する改善策を見出すことは、大切なことである。
 ○よさをさらに強化するための改善策を見出すことも大切だが、とかく見落とされがちである。

◆実践事例発表校の取組から◆

① 結果の整理

- ア 設定通過率、県平均、本校平均の結果(グラフ)を印刷
 - ・通過率が低い問題(△)と高い問題(○)の確認
- イ 問題用紙にも○△を記入し、結果を視覚化
- ウ 特に正答率が低い児童への個別指導

② 結果の確認・改善策の検討

- ア「やまぐち学習支援プログラム」担当者※1と学級担任が、結果資料をもとに、学力状況の確認・考察
- イ 補習や個別指導の内容や方法について確認

③ 結果の共有

- ア 結果資料を全職員に回覧
- イ 他学年の課題を把握、全校の傾向を確認、課題の共有化

④ 学力向上プランへの反映・実践

- ア 各学期末における学力向上プランの見直し
- イ 改善点を学力向上プランに追加※2
- ウ 共通理解、共同実践

※1 「やまぐち学習支援プログラム」担当者を校務分掌に位置づけ、効果的な活用を推進すると効果的。

※2 子どもの学力状況をもとに、学力向上プランを改めていくことが重要。

・今までは、やまぐち学習支援プログラムは各担任に任せて、全校的な学力向上にどのように役立ってきたか検証していなかった。来年度に向けて学力向上プランと学習支援に役立てたい。
 ・「どんな力をつけるのか」「評価するのか」がはっきりしていればそのまま学期末のテストに使える。市販のテストは必要なくなる。問題点は、評価規準共有までの教師の努力である。
 ・PDCAのCAを大切にしたい。やまぐち学習支援プログラムを活用すると子どもたちに力がつくということが確信できた。
 ・全県下の学力が上がればよいと思う。なにより、子どもたちの「わかった・できた」という声につながればよいと思うので、県下の先生方の参加は有効であった。
 ・自分自身が作成委員をさせていただいて、本当に勉強になった。指導事項はもちろんだが、全国学力・学習状況調査の問題からPIISA型読解力についても見直した。研修したことを授業にも生かしていけると思う。